

目 次

新	新
さの	さの
曲	曲
部	部
西行	西行
西行桜	西行桜
栄ゆる宮	栄ゆる宮
嵯峨の秋	嵯峨の秋
嵯峨の春	嵯峨の春
桜狩	桜狩
桜川	桜川
狹衣	狹衣
笛の露	笛の露
里の曉	里の曉
五月雨	五月雨
さむしろ	さむしろ

新	新
さらし	さらし
残月	残月
しの	しの
四季の遊び	四季の遊び
四季の艶	四季の艶
四季の恋	四季の恋
四季のすさび	四季のすさび
紀の路の奥四季の段	紀の路の奥四季の段
四季の富草	四季の富草
四季の友	四季の友
四季の眺	四季の眺
四季の富士	四季の富士
四季の雪	四季の雪
賊機帶	賊機帶

目 次

七福音	六	住吉	一一
忍ぶ草	六	せの部	
石橋	六	清華園	一〇
松蔭の月	一〇	閑尽し	一〇
猩々	一〇	閑寺小町	一〇
松上の鶴	一〇	閑の清水	一〇
松竹梅	一〇	その部	
源氏十二段淨瑠璃供養	一〇	園の秋	一〇
新浮舟	一〇	園の詠	一〇
新道成寺	一〇	たの部	
新七草	一〇	玉川（組歌 六玉川）	一〇
深夜の月	一〇	高砂その一	一〇
すの部		高砂その二	一〇
末の契	一〇	竹筏	一〇
末の松	一〇	玉鬘	一〇
須磨の風	一〇	玉椿	一〇
墨絵の月	一〇	玉の台	一〇
墨絵の蘆	一〇	鶴の巣籠	一一
民の賑	一一	手習	一一
ちの部		常磐	一一
地久節	一一	常磐の栄	一一
竹生島（山田流）	一〇	友千鳥	一一
竹生島（生田流）	一一	鳥追	一一
千里の梅曲	一一	道中双六	一一
千歳の春	一一	長良の春	一一
千鳥の曲	一一	那須野	一一
千箱の玉章	一一	夏の曲	一一
茶音頭	一一	夏の眺め	一一
千代の寿	一一	夏やせ	一一
千代の栄	一一	なでしこ	一一
長恨歌曲	一一	名取川	一一
蝶の夢	一一		
千代の寿	一一		
つの部			
椿尽し	一一		
摘要	一一		
鶴龜	一一		

目次

四

七草	100
七小町	101
難波獅子	101
ね の 部	
根岸の四季	104
子の日	110
子の日の遊	111
根引の松	114
参考文献	115
引用歌・詩・故事・名句索引	116
題 字	117
田 辺 尚 雄	118
おもて	
おはな	119
おひる	120
おひるの	121
おひるの	122
おひるの	123
おひるの	124
おひるの	125
おひるの	126
おひるの	127
おひるの	128
おひるの	129
おひるの	130
おひるの	131
おひるの	132
おひるの	133
おひるの	134
おひるの	135
おひるの	136
おひるの	137
おひるの	138
おひるの	139
おひるの	140
おひるの	141
おひるの	142
おひるの	143
おひるの	144
おひるの	145
おひるの	146
おひるの	147
おひるの	148
おひるの	149
おひるの	150
おひるの	151
おひるの	152
おひるの	153
おひるの	154
おひるの	155
おひるの	156
おひるの	157
おひるの	158
おひるの	159
おひるの	160
おひるの	161
おひるの	162
おひるの	163
おひるの	164
おひるの	165
おひるの	166
おひるの	167
おひるの	168
おひるの	169
おひるの	170
おひるの	171
おひるの	172
おひるの	173
おひるの	174
おひるの	175
おひるの	176
おひるの	177
おひるの	178
おひるの	179
おひるの	180
おひるの	181
おひるの	182
おひるの	183
おひるの	184
おひるの	185
おひるの	186
おひるの	187
おひるの	188
おひるの	189
おひるの	190
おひるの	191
おひるの	192
おひるの	193
おひるの	194
おひるの	195
おひるの	196
おひるの	197
おひるの	198
おひるの	199
おひるの	200
おひるの	201
おひるの	202
おひるの	203
おひるの	204
おひるの	205
おひるの	206
おひるの	207
おひるの	208
おひるの	209
おひるの	210
おひるの	211
おひるの	212
おひるの	213
おひるの	214
おひるの	215
おひるの	216
おひるの	217
おひるの	218
おひるの	219
おひるの	220
おひるの	221
おひるの	222
おひるの	223
おひるの	224
おひるの	225
おひるの	226
おひるの	227
おひるの	228
おひるの	229
おひるの	230
おひるの	231
おひるの	232
おひるの	233
おひるの	234
おひるの	235
おひるの	236
おひるの	237
おひるの	238
おひるの	239
おひるの	240
おひるの	241
おひるの	242
おひるの	243
おひるの	244
おひるの	245
おひるの	246
おひるの	247
おひるの	248
おひるの	249
おひるの	250
おひるの	251
おひるの	252
おひるの	253
おひるの	254
おひるの	255
おひるの	256
おひるの	257
おひるの	258
おひるの	259
おひるの	260
おひるの	261
おひるの	262
おひるの	263
おひるの	264
おひるの	265
おひるの	266
おひるの	267
おひるの	268
おひるの	269
おひるの	270
おひるの	271
おひるの	272
おひるの	273
おひるの	274
おひるの	275
おひるの	276
おひるの	277
おひるの	278
おひるの	279
おひるの	280
おひるの	281
おひるの	282
おひるの	283
おひるの	284
おひるの	285
おひるの	286
おひるの	287
おひるの	288
おひるの	289
おひるの	290
おひるの	291
おひるの	292
おひるの	293
おひるの	294
おひるの	295
おひるの	296
おひるの	297
おひるの	298
おひるの	299
おひるの	300

「さの部」

西

行

箏
三絃
平調子
二上り

〔大意〕西行法師の和歌を綴り合せ、北面の武士から法師になり、吉野の花を愛でた歌人になったことをうたっている。初代山登松和検校（山田檢校門人、文久三年八十二才歿）の作曲になる。

われも昔はますらをの、真弓、楓弓年をへて、ひきたがへたる朝夕
は、命なりけり旅衣、苔の衣に身を染めかへて、心の塵を袖はらふ、
やばな世界にいとしきの、いとしかはいは昔の事よ、のう、よしの
山、よしの山、こぞの栄の道かへて、まだ見ぬ花のいろいろを、た

づねたづねて歌枕、筆のすさびの墨染ざくら、うつろふ春の花の顔、
やせる姿に笠きたなりを、水の鏡にかけとめて、しばし立ち寄る柳
かげ。

〔語釈〕〔昔はますらをの〕西行は佐藤義清という鳥羽院の武士で、従五位下、檢非違使になつた人である。親友、佐藤憲康の急死に世をはかなみ、嵯峨野に出家した。〔真弓〕檀の木で作った丸木の弓。〔楓弓〕楓の木で作った丸木の弓。伊勢物語、二十三段、「楓弓真弓つき弓年をへてわがせしがごとうるはしみみよ」（弓には梓弓、真弓、楓弓と品々あるよういろいろ／＼辛い思をして年月を経て來たが、自分があなたを愛したように、その人を愛しない）。〔ひきたがへたる朝夕は〕ひきたがえるは弓をひきちがえる意を含ませてゐるわけで、朝夕が交替に訪れる。〔命なりけり旅衣〕旅を生命とする。新古今集、卷十、覇旅歌、西行法師、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」（年とて又小夜の中山を越えると思ったか、思はなかつた。これもやはり存命していたからだ）。〔苔の衣〕僧衣。〔心のちり〕